

ずりだすことと鎖は暗闇からいくらでも引き
 の重みを感じながら、牢を自在に動くこと
 ができそうだった。温かだった。しかし、光
 の下に長く留まる。あつたしはほど上に、耐
 えがたくなつた。あつたしはほど上に、耐
 びるとまた、闇に戻つた。あつたしはほど上に、耐
 かつた。あつたしはほど上に、耐
 凍傷を負い、うなほに冷え込んだ。あつたしはほど上に、耐
 た自分の居場所を見つけた。あつたしはほど上に、耐
 は光と影の狭間をさまよいつづけた。あつたしはほど上に、耐
 牢番は鉄の触れ合う耳障りな音を響かせながら
 ら格子の傍まで来ると、視線の見える鉄の
 マスクをあたしに向ける。あつたしはほど上に、耐
 と見張るのだ。あつたしはほど上に、耐
 の隅にうずくまり、動かなかつた。あつたしはほど上に、耐
 痛んだ。その痛みは胸に空く拳一つ分ほ
 どの穴だった。穴の奥は黒々とぬめりがある
 る。それは血だ。穴の奥は黒々とぬめりがある
 も見えない。背中に突き抜けていくわけは
 なかつた。あつたしはほど上に、耐
 ない。あつたしはほど上に、耐
 にでも見えない。あつたしはほど上に、耐
 ひぎの隙間に伏せ、小さく蹲うずくまつた。あつたしはほど上に、耐
 牢番が去ると、今度は入れ違いに獣が訪れた。
 それは一匹の豹だ。美しい毛並みを月の
 光に輝かせる。あつたしはほど上に、耐
 鎖を引かせる。あつたしはほど上に、耐
 に紐で縛つてある麻袋を鉄格子の隙間に押し

付けた。あたしは手伸ばし、紐を解いて、
 その麻袋を引き入れた。中には小さな水筒と、
 固く焼しめられたパンが入って、いた。あたし
 は豹の頭を撫で、礼を言う。不思議と胸の
 貪った。空腹が満たされ、やっ、あ、あ、あ、
 穴の痛みも和らいだ。そうやって、あ、あ、あ、
 食事に夢中になっただい。間に、豹はいっの間
 にか姿を消してしまっ。間に、豹はいっの間
 繰り返された。出来事はあつた。牢で何度も
 りかび臭いエアコンの風が鼻につく。ひんや
 の毛先に煩わしさを覚え、右耳をくすぐる。髪
 から閉じていた髪を、ぼんやりと、
 た明らささとサラっ。意識がはつきり
 身を包み込んで、神経がチクタクと痛み、
 して悪さ。蘇った。生理は終わった。かもし
 分の悪さ。蘇った。生理は終わった。かもし
 から、この不調は別の病気の。かもし
 気分は、すま、落ち込んだ。今朝は今より
 酷い頭痛で目覚め、それでも起き上がる。電
 してベッドから落ちた。おまえが病欠なんて珍
 で上司に伝え、落ちた。おまえが病欠なんて珍
 しい。行け。そうなら、病欠なんて珍
 あった。病気の。診察科を、総合病院に行
 った。結果、心療内科の医師からカウンセリング
 された。結果、心療内科の医師からカウンセリング
 ング受けて。明日、療内科の医師からカウンセリング
 ング受けて。明日、療内科の医師からカウンセリング

た六 ト た を っ テ そ ク と 暈 る う 悦 い 神 が う っ て た 私 情 た っ た え で
 が 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な び た 自 は 頭 に た いた 分 悲 頭 には 取 情 たい っ た いた よ
 、 を に の か 復 ° の と 中 から 持 は 襲 と 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 ベ 回 私 が 水 の り さ 彼 の 今 手 帳 を 切 以 上 ° の 苦 し 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 タ っ が で の せ た 会 束 の 日 の 夜 、 一 か パ ラ パ ラ と め 枕 元 の バ ッ と 暈 る う 悦 い 神 が う っ て た 私 情 た っ た え で
 つ て 目 を 氣 眠 導 入 剤 を 取 出 し 、 少 し 胸 は 高 鳴 の ° と 暈 る う 悦 い 神 が う っ て た 私 情 た っ た え で
 く いた 覚 ま し た 痛 は 大 分 、 刻 は 既 っ て 夕 方 っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 頸 ° 頭 し た じ に 右 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 や ° 頭 し た じ に 右 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 う 痛 は 大 分 、 刻 は 既 っ て 夕 方 っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 な 痛 は 大 分 、 刻 は 既 っ て 夕 方 っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 じ に 右 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 に 右 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 右 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 手 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 を 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 回 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 す と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 と 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ
 、 六 時 次 ル ば 回 た ル の か 氣 私 に と な 苦 の ° の 自 悲 鳴 を 離 な っ いた 込 は 取 情 たい っ た いた よ

「あ、この子大きくなっただね。」
 私はその写真を愛でた。だから「
 「そりゃ二年前は小二だからな」
 「女の子みたい、いや？」
 「そんな話も聞いてるんだ。」
 テルは困ったように口をゆがめた。
 「奥さんも相変わらず抱いた。彼女の佇ま
 二年前も私は同じ感想を抱いた。彼女の佇ま
 いには、その美貌と同時に懐かしさを感じ、
 私の中で何かが疼いた。長々と写真を見つめ
 る私を、テルは困惑の色を浮かべたまなざし
 で見ていた。奥さん好きだな。」
 「好きよりは違う形の出会いだった。私の舌の上をただの
 トモダチという言葉は、私の舌の上をただの
 音として滑っていた。違っていた。私の舌の上をただの
 「中は全く違っていた。違っていた。私の舌の上をただの
 私はテルにその違いに気づかなくて、尋ねてみたいと
 思ったけれど、すぐに答えが怖くなり、好いと
 心をぐっと抑えた。そして誤魔化した笑い
 話題を有耶無耶にし、グラスに残ったワイン
 を一気に空けた。し、グラスに残ったワイン
 「どう違うか？」
 た携帯を「ブルに伏せ、」
 うので、私は「全然」
 て酒で膨らむ感情に任せ、
 でそれが本当かどうかなんて分らないところ
 んたよ。はぐらかすし、吐き捨てる。その
 言葉は発した自分でも驚くほど冷たく耳に響

が、悦びを霞ませる。影の正体が分からぬこと
 が、本当に私と深く通じることがこの先、あ
 るのならば、そんな私の正体も見える気がし
 た。しかし、二年の歳月を経た今もそれが見
 えそうだと思えた。試しはない。私を求め、彼
 と、彼を通じて影を求め、私。己の中にぼつ
 かりと空いた、その影の正体が分からぬこと
 が、悦びを霞ませる。影の正体が分からぬこと
 は、胸の中、微睡んでいた。その光が薄く漏れ
 ている。私は午前六時。三時間後に病院に行
 を確かめた。午前六時。三時間後に病院に行
 かなければならぬ。三時間後に病院に行
 「メイクしな。用事あるの」。
 「上辺はいない。彼の無關心から漏れる悪態
 に、私は寂しさを覚えた。関心から漏れる悪態

がらも、その心の波を相変わらず感じること
 が出来ない。ただ肌を通じて荒れ狂う熱に浮
 かされるだけだ。感覚を総動員し、彼の心を感
 たいとすべからず、探った。指の腹で柔らか
 輪郭に手がかりを、胸筋や静かに上下する厚
 脂肪の下の固い、胸筋や静かに上下する厚い胸
 板の筋をなぞり、大胸筋、鎖骨、喉ぼとけと
 辿って行く。やがて、その指は顎髭のぶつ
 つに触れる。やがて、その指は顎髭のぶつ
 背後に深く沈む影にまで及んだ時、私は初め
 て快感を得た。それは罪悪感を伴った快感だ
 った。目の前で蠕動する肉体に宿るハズの魂

アラって総合病院のカウンセリングのグループで私を待
 スタイルに、明る下茶のハジューアールストツ
 いる品な雰囲気女性カウセ
 胸に差し込んで、私にはベツドから
 沈む気が持ち、何をやら声かけ、私にはベツドから
 シヤワーに思え、逃げ込んでは、自分が穢
 れているように、青い、溢れて、全身を包む。意
 もり、シヤワーの青い、溢れて、全身を包む。意
 識の輪郭が鮮明になる。私は冷水に、肌感覚は暖
 味さを増して、きれいな、淡い、冷たい、水を込めて洗
 流しかして、きれいな、淡い、冷たい、水を込めて洗
 し、水、清らかな、冷たい、冷たい、水を込めて洗
 変わる。私は、清らかな、冷たい、冷たい、水を込めて洗
 ンの方捻った。シャワーは、清らかな、冷たい、冷たい、水を込めて洗
 全身の温度を上げ、書きす。山奥の滝と、か
 けられ、穢れを清める。念もすぐに、温もり、に、紛
 だろ。か。その、疑念もすぐに、温もり、に、紛
 私、頭は、再び、熱に、浮かされた。温もり、に、紛

「どう過ごされてもいいんです。あなたが心
 身を休ませられたのもいいんです。あなた
 その言葉に私はホッと胸を撫でおろす。
 「今の仕事はお好きですか？」
 「天職だと思っただけですか？」
 「家族は？ひとり暮らしですか？」
 「マンション？どこかですか？」
 「ふるさとは？村と山里です」。
 「よく帰った？」。誰もいないので。
 「いいえ。帰った？」。誰もいないので。
 「失礼ですが、両親は？」。
 「父は七年前に病で亡くなりました。その時、
 母は町中のマンションで亡くなりました。越しまし
 の兄弟が管理してくれて、卒業後は友人もあちこち
 学校までしかなく、卒業後は友人もあちこち
 に出ているので知り合ってもほぼおらず。中学
 を出てからはほとんど帰っていません。
 あまり話を機会もない、自分の人生にまつわ
 る事柄を口にしたいとき、その小さな自分に思
 へた。今の私に影を落とすように思
 「その事で何か悩みがありましたか？」。
 心を讀んだように、質問を投げました。沈黙し
 私はずっと揺らぎをまだうまく言葉には変換し
 た。自身のかしさを感じた。言葉には変換し
 できずもどかしさを感じた。言葉には変換し
 「家は親戚が年老いて管理できなくなつたと
 きはどうするかは考えますが、それはあま
 の時です。病気の原因になるものはあま
 り。」。

「ずっと気がなっ
 表情は変えず、静かに
 いざらしい自分のこと
 思わせる。蠱惑的な響
 分でも分からな。それ
 私身もだえし。ふと他
 ていた。中学生時代の
 それ以上。イメジは眩
 「他人には話しづら。悩
 先を促す。彼女の質問に
 の夢のこと。思い出した
 「女は身を乗り出した。
 「どんな夢？」。そんな
 「牢屋にいます。そんな
 らく。無理のない範囲で
 「その夢は最近見たん
 「昨日です。ただこの夢
 見るように。なっ。二回
 「ああ。これは同じ夢だ
 「悪い夢。さぶる彼女
 自己認識を揺さぶる。強
 夢の記憶を急いで手繰り
 た。答え。後判に迷い、
 振った。自分でも判断の
 た。彼女。質問を止めた
 の言葉。次は。ただ静か
 少言。葉を、次の反応を
 やり、つ湧き上がる不定
 っくりと吐き出した。葉
 の型に押し込み、無理

「診断は少なくて、二か月は療養が必要との判断
 「峰です。今ようしでしようか？」
 「はい。1コールで電話は繋がった。
 は会社の上司に電話を掛けた。会計を待つ間、私
 待合室の椅子にもたれ、会計を待つ間、私
 に出た。逃げよう。カウソセリングルム
 下に向けたまま、黙って立ち上がり、一礼し
 る勇気もなかつた。酷く気に入ったが、確かめ
 して見ているのか。酷く気に入ったが、確かめ
 私には彼女が挙動不審な相手。今、どんな顔を
 方は「ありがとうございまして。」「頷きながら、
 「この後、また診察です。ね。薬も使った治療
 た。視線を切つて、自身の膝のあたりを凝視し
 ねたいといふ欲求に駆られた。私は半ば強引
 瞳に私は、寛容さを求め、感情のすべてを委
 やり取りに慣れていられぬ。彼女の深い
 視線を逸らすことができなかった。患者との
 ま見上げたら、そのまなざしの交差から、私は
 すらりと立ち上がった。彼女を、私は座ったま
 を楽にした。話せた事は、少しだけ自分
 不満を抱いたが、話せた事は、少しだけ自分
 の提案に、私は腑に落ちない。もやもやとした
 「・・・そうですね。」「雲をつかむような彼女

グル厚いムは、盛り閉ざされた昼間のダイニン。
 ける振動が伝わる。
 の間、湯沸かしのハンドルを回す。右手に豆の碎
 瞬間、沸かしの器のドリルを押し、湧くまで
 木製ミルに、スプーン二杯分の豆を入る。
 と、フレグランスの香り、珈琲豆の奥で膨らんだ。
 ドリッパを取出した。珈琲豆の袋を空ける。
 私が、自分への時間を作る。豆の袋を空ける。
 イクを落とす。落ち着いた。この部屋に気づき、気持ち
 ながら、私には必要のない。この部屋に気づき、気持ち
 窓ごしに、私には必要のない。この部屋に気づき、気持ち
 タオルを巻いて、新しい寝間着に着替えて、頭に
 浴びると、私は新しい寝間着に着替えて、頭に
 かまなかった。この病の原因になるものが見いだせな
 まだそこ。この病の原因になるものが見いだせな
 つの自分の物語が展開する。そこには、もう一
 文章を遡り、メモに付けてみる。そこには、もう一
 いで携帯のメモに付けてみる。そこには、もう一
 睡眠ながら、夢を見ていた。このように、思い出し、急
 んと長いこと眠って、入った。このように、思い出し、急
 た不安解消と睡眠導入の薬の効か、ずいぶ
 十一時を回った。携帯に表示された時刻は、昼の
 に押し付け、悦び、豹は目を細めて、しばらくの
 残された、旅の支えとなった。失ったあたしに

欲と気力はなかなか湧いてこなかった。静脈
 から出血したような色のは、無理やりのボロネーゼの甘味
 パスタに絡め、酸味が口内です。喉に残る不快な感
 とトマトの酸味が口内です。喉に残る不快な感
 すぐには流す。喉に残る不快な感
 触を洗い流す。喉に残る不快な感
 察した最近、何かあった？「私の様子に何かを
 尋ねた。何か、食事、落ち着いたころ、テルが
 「え？今も体調悪い？」。二か月くらい「。精神的
 なもので、だから遣い私には「大丈夫、精神的
 口調で返す。うつつ病つてやつよ」と平坦な
 「大変だった。うつつ病つてやつよ」と平坦な
 ラスにワインを注ぎ、あ、テルはそれ以上詳しく
 は聞いてこなかった。言葉や態度の中に、見せる無関
 心や欲望を私は、見ないふりをしてきた。無関
 らなく、テルもまた、私の見ないふりをしてきた。無関
 見ぬふりをした。私の見ないふりをしてきた。無関
 ちは喧嘩なんて、私の見ないふりをしてきた。無関
 今を壊しかねない。私の見ないふりをしてきた。無関
 ると、いう暗黙の共通認識を隠れ蓑に、私たちに
 は情性のままに付き合っている。関係が深め
 依存し合う。哀しい関係が、私に己的な欲望だけ
 合「だっ。た。黙っ。て。私。が。注。い。だ。ワ。イ。ン。を。き。で
 飲みながらの正体を、胸の内、で考え続けている。求めていた。
 。

を抱くものを手放せれば楽になる。変に希望
 正体が自覚させた。本当に望んでいたものは、
 私がテルのあらし胸を刺した。その痛みは、
 防備な彼の「分らない」も、唐突に無
 った。彼の「分らない」も、唐突に無
 緊張を孕んだ声色には、今までのない重みがあ
 「もう別れようか」。言った。彼はゆっくり、
 しかし、はつきりと言った。後、彼はゆっくり、
 の声。しばらくの沈黙の後、彼はゆっくり、
 諦めと失望が入り混じった。初めに聴くテル
 したよ。どうしたんだよ。急に「。最初は最初
 「互いに干渉しない」といふことは最初約束
 く動揺した。ハズの答えに私は、それでもひど
 かつていた。ハズの答えに私は、それでもひど
 頬をやさしく撫で、沈黙の拒絶を示した。分
 は長い溜息で受け止めた。そして左手で私の
 ゆっくりと、力を込めて発した私の言葉を彼
 「私といてよ」。私を正面から見据えた。
 テルは半身を起し、私を正面から見据えた。
 「奥さんに会わないでよ」。その変わらなさが
 「大丈夫さ」。その変わらなさが
 「私どうかしてみたい。大丈夫？」。
 れた。冷徹に返す。すぐに後悔の念に襲わ
 めて「と冷徹に返す。すぐに後悔の念に襲わ
 も「一杯の明るい口調で問う。テルに「それ
 「明かりつけようか」。酷く疲れた、それで

あたしは柔らかな毛の奥にまで手を伸ばし、
 首に腕を巻き付け、頬に口づけをする。胸に
 空いた穴は未だ痛んだが、豹に触れている時
 間だけ、それは時間も忘れていられた。豹と
 豹と過ぐす時間の中で気づいたことがあつ
 た。豹の首には毛に埋れた細い首輪があり、
 そこには小さなプレートが一枚かかっていた。
 プレートにはパの文字。それは欠けていた最
 後のピースのようだった。それは欠けていた最
 二晩、三晩と古城跡で平穏な日々が過ぎ去
 ったある日の満月の夜のことだった。姿を
 現さなかつた。あたしは酷く不安になり、城
 跡をあちこち探し回った。果たして豹は直ぐ
 に見つけることが出来たが、声をかけること
 は躊躇ためらわれた。
 小高い草原の丘の上で、あたしの豹は、そ
 の傍らにもう一匹の凜とした別の豹を座らせ、
 その長くしなやかな首を絡ませていた。時折、
 互いの毛を舐め合うその二匹の姿は、これま
 でに見たこともないほど、美しくかった。二匹
 を認めながら、あたしは、二匹から目を離すこと
 かつた。それでいて、次第に胸の穴が酷く痛み出
 も出来なかつた。次第に胸の穴が酷く痛み出
 し、あたしは、麻布はべつとりと湿り、気がづ
 の場に跪いた。血が大量に滴つていた。徐々
 いた時には、血が大量に滴つていた。徐々
 増す痛みにあえぎながら、震える頭を持ち上げ
 目を逸らし、あえぎながら、震える頭を持ち上げ
 た。最も求めない、絶対に手に入らないもの
 の。喜びと絶望が入り混じり、あたしの穴の

中を濁流のごとく荒れ狂った。血の混じった
 涙があたしの両眼から溢れるのが分かった。
 あたしは、永劫に繰り返されるような、この
 苦しみから抜け出したいと願った。
 ね、起きた。揺さぶられ、あたしはベッドから跳
 一寸、遅れてから自分の声だった。気がついたのは
 一部屋の中は耳鳴りがするほどの静けさに満
 ちていた。窓は暗く、部屋の静けさに満
 ちていた。あたしはあたしのものだ。
 「あの人、あたしはあたしのものだ。」
 自分、口から出た言葉だとは思えなかった。
 あたしは携帯をつかみ取って、アクティブに
 した。時刻はテルと会った日の翌々日、深夜
 二時を回っていた。もうおよそ丸一日、眠っ
 ていたことになった。家族写真の記憶が鮮明に
 蘇った。テルは今、あの彼女と共にいる。
 「この「好き」だという感情から逃げ出した
 い」。あたしは心の底から、そう願った。あ
 たしは画面に履歴を表示し、テルの名前をタ
 ップした。十回ほどのコールの末、電話はつ
 ながった。
 「・・・どうしたんですか？こんな時間に」
 よそよそしい口調のテルの声には、わずかに
 荒い息遣いが交じっていた。あたしは彼女が傍に
 話を装っているのだ。あたしは彼女が傍にい
 ることを確信した。あたしは彼女が傍にい
 「今、愛している。あたしは彼女が傍にい
 凶悪な感情だった。と言った。」
 「え？」

驚いて聞き返すテルの動揺した声に、あたし
 はさらに声を張り上げ、要求した。「愛して、
 悲鳴のような哀願の感情にのせて、「愛」と
 いう言葉が口走った瞬間、あたしは、その
 意味が捉えられなくなつた。あたしがテルに
 求めていたものは愛なのか。荒くなる呼吸を
 必死に鎮めようとあたしは大きく息継ぎをし
 た。執着。独占欲。彼女とのつながり。手に入
 らないものを彼を通して、手に入れたふりを
 し続けている。願いに自分を偽り、ごまかして叶う
 はずもない。願いにただ悶えている。あたしは
 穢れていない。プツ。あつけない音と共に電話は切れた。あたしは
 自ら、小さな可能性を壊したことを悟つた。あ
 なたは、枕に顔を埋めた。柔らかな羽毛の感
 触と息苦しさを、そしてこの体の重みだけが、
 あたしなんだと思つた。それ以上でも以下で
 もない。父の言葉が浮かんだ。
 「思いやりを持てる立派な大人になりな
 い」。それは自らを封じ込める言葉だ。あた
 しは洗面台に行き、鏡を見た。そこには虚ろ
 な目をした、あたしの本当の姿が映つていた。
 翌日の朝、あたしは車で故郷の村に向かっ
 た。あの場所に行かなければならぬという
 衝動に駆られ、メイクもせずラフな格好で家
 を
 ンズと白いブラウスというラフな格好で家を

出た。中学卒業以来の、十年ぶりの帰郷。人
 気のないうち、森の奥へ入り道
 込んで車を止め、赤い神社の鳥居のよう
 を下ると、赤い神社の鳥居のよう
 にかれた。通行禁止とある。黄色い
 淵がある。私は躊躇なく、その奥には、
 下った。谷に生い茂る木々は、ぬるっ
 湿り気を帯びて、昼間にも関わらず、
 ほら穴のようになり、暗かっ。次第に
 小く聞こえ始めた。せせらぎの音が、
 んと大きくなっている。よくあは、
 淵に辿り着いた。秘密の淵。高みから
 ちる滝は、緑の隙間から差し込む光に
 らと輝いていた。そしてあ、このあた
 身に謝りたかっ。あ、あ、あ、あ、あ、
 出した。岩の上立ち、うねる滝つぼを
 した。泡沫は浮かんで沈み、吸い込ま
 うな青色だった。その青は夢で見た月
 あ。文字を思い出させた。
 Purgatory。煉獄。あそこは天国と地獄の狭間
 だ。苦しみを繰り返す場所。やっと抜け出
 た。思った。その先にも、同じ苦し
 と。うの。い。
 とう胸の内。つぶやき、前に足を踏
 としたとき、背後に気配を感じた。あ
 迎った。森の奥から誰かが近づいて
 ている。分かった。きれいな顔立ち

影を向いて、あたしは立ち上がった。
 こちを、見つけた。駆け寄ろうとした。
 生きてもいきたくない。と声を振り絞って答えた。
 あたしは、「はい。」と声を振り絞って答えた。

了